

「タンゴ・リブレ 君を想う」 ★★★

2013（平成25）年10月26日

鑑賞<テアトル梅田>

監督：フレデリック・フォンテーヌ

脚本：アンヌ・パウリスヴィック、フィリップ・ブラスパン

JC（看守）／フランソワ・ダミアン

アリス（タンゴ教室に通う30代の女性）／アンヌ・パウリスヴィック

フェルナン（アリスの夫、受刑者）／セルジ・ロベス

ドミニク（アリスの愛人、受刑者）／ジャン・アムネッケル

アントニオ（アリスの息子）／サガリー・シャセルオ

刑務所でタンゴを教えるアルゼンチン人受刑者／チチョ・フルンポリ

刑務所でアルゼンチン人とタンゴを踊る相手役受刑者／パブロ・テグリ

2012年・ベルギー、ルクセンブルク、フランス映画・97分

配給／ファインフィルムズ

<タンゴは魂。それは否定しないが、この設定にはムリが・・・>

2012年のベネチア国際映画祭のオリゾンティ部門で審査員特別賞を受賞した映画、また新聞紙上では、谷崎由依氏が「月刊MVC.（メツチャビビツときたシネマ）」で、「おっさん達の奇妙な五角関係」という見出しを使って、長野亮之介氏が「銀幕一刻」で「官能的 タンゴのドレス」という見出しを使って、本作を誉めあげていたので、本当はあまり気が進まなかったが、劇場へ。刑務所の看守をしている孤独そうな中年男JC（フランソワ・ダミアン）の趣味はタンゴ。タンゴ教室に通うのが彼の唯一の楽しみらしいが、私にはまずその設定自体がわかりづらい。とは言っても、そこではじめて出会い、たまたまパートナーとして踊った30歳過ぎの、ちょっと派手めのいい女アリス（アンヌ・パウリスヴィック）に興味を持ったという設定は、なるほど、とうなずける。しかし、JCが刑務所内で担当している受刑者のフェルナン（セルジ・ロベス）とドミニク（ジャン・アムネッケル）の面会相手がこのアリスだったという設定は、いかなもの・・・？

もっとも、それによって受刑者の近親者との接触を禁じられている看守JCと、夫のフェルナンと愛人のドミニクという2人の受刑者と定期的に面会している女アリスとの奇妙な感情が芽ばえてくるというのが本作のテーマだから、映画の設定としてはそれでOK。そして、こんな設定こそが、「タンゴは魂の踊りだ。哀しみ、怒り、弱さ、優しさ、タンゴは自由の舞だ。」という、タンゴから人生を論じる本作の真骨頂だが、私にはイマイチ納得感が得られない。

<刑務所がタンゴ教室に？そんな設定にも違和感が・・・>

本作は「刑務所の中の『Shall we ダンス？』（96年）」と評されているそうだが、フェルナンの妻でありドミニクの愛人であるアリスが、コトもあろうに自分たちを担当している看守とタンゴを踊ったと聞いてフェルナンとドミニクの気分がいいはずがない。そこで、さてどんな展開が待っているのかと注目していると、なぜかドミニクが刑務所内でアルゼンチン人の囚人（チチョ・フルンポリ）を探し出し「タンゴを教えてくれ」というストーリーになっていくからアレレ・・・。しかも、この囚人はいったんは「俺は踊れねえ」と断ったクセに、数日後には相棒（パブロ・テグリ）を見つけ出して、見事なタンゴを披露したからビックリ。その結果、刑務所内はいつしかタンゴ教室に化していくのだが、このストーリー展開も私にはアレレ・・・。

また、ダンスそのものは素晴らしいのだろうが、何しろいかつい男たち同士の踊りだけに、『ウエスト・サイド物語』（61年）や『シカゴ』（02年）（『シネマールーム2』59頁参照）で観た素晴らしいダンスシーンと同じように感動することは私にはできなかった。したがって、フェルナンとドミニクが男同士で踊るうちに、ドミニクの下半身に異変（？）が生じてきたことにフェルナンが驚くシーンにも違和感が・・・。

<このヒロインはちょっと奔放過ぎるのでは？>

ヒロインのアリスは、15歳の息子アントニオ（サガリー・シャセルオ）がいるにしてはスリムで魅力的だが、なぜいつもあんなにド派手な服装をしているの？本作には冒頭、フェルナンとドミニクが拳銃で人を殺すシーンが登場する。この殺人事件のためにこの2人が服役していることがわかるが、フェルナンがアリスの夫でドミニクがアリスの愛人だとはなかなかわからない。この2人は同室に収容されているし、面会の時も2人一緒だが、こりゃ一体どうなってるの？そんな疑問を持ちながら観ていると、タンゴをめぐるさまざまな問題点が噴出する中で、実はアントニオが夫であるフェルナンとの間の子供ではなく、愛人であるドミニクとの間の子供であることがフェルナンの口から告げられるから、またまたアレレ・・・？

母親が毎回2人の男と面会しているだけでもアントニオはイヤなのに、最近母親は看守のJCとも付き合っているようだ。こりゃ、とてもじゃないがやってられない。アントニオがそんな気分になったのは誰でも理解できるはずだ。それでなくても、思春期、反抗期にある15歳の息子アントニオは、既に父親のフェルナンが隠し持っていたあの時の拳銃を探し出していたから、自分の目の前で母親のアリスと看守のJCがイチャイチャしている姿を目撃すると・・・。

<看守と受刑囚の妻がこんなことしていいの？>

タンゴは魂の踊り、そしてタンゴは哀しみ、怒り、弱さ、優しさの自由の舞かもしれないが、JCは刑務所内で看守という立場にあるのだから、それなりの社会的責任や職業人としての義務があるはずだ。したがって、タンゴ教室でたまたま一度だけ踊った相手が受刑囚の妻だったと知れば、それ以上の接触を断つのは当然。またアリスの方も、それを夫や愛人が聞いたらきっと気分を害するだろうと察した上で、今後タンゴ教室でJCと接触するのは差し控えるのが当然だ。ところが本作を観ていると、JCもアリスもそんな当然の常識に反する行動ばかりくり返すから、アレレ・・・？

ドミニクがなぜ自殺未遂という行動に出たのかはよくわからないが、アリスの家を訪れてまでJCがそれを報告する必要がどこにあるの？また、アリスがJCの家を訪れてきた時、近所の目を気にするのは当然だが、だからといって家の中に招き入れてどうするの？しかも、さっさと用件だけを聞けばいいのに、お茶の用意までして長居させるとは・・・。さらにアリスが部屋から出て行った後も、窓からそのカッコいい後ろ姿を眺めていると、何とそこに母親の行動を監視していたらしいアントニオの顔があったから、JCはビックリ。こんな行動をくり返していたら、ご両人にさまざまな問題が噴出してくることは必至だろう。

本作を観ていると、JCもアリスもタンゴが好きなら人生は無軌道なのか、とつい思えてくる。そのハイライトは、アントニオがフェルナンとの間の子供ではなく、ドミニクとの間の子供であると打ち明けられたことによって、アリスとアントニオが母子喧嘩をしている大騒動の中、JCがアリスの家を訪れ「僕と一緒にタンゴの国に行こう。息子も連れて・・・」などと誘うシーンだ。いくらタンゴが好きでも、またタンゴがいくら情熱的な踊りだといっても、こりゃ八チャメチャでは・・・？

<JCの決断は？この意外な結末に唖然>

刑務所からの「脱獄」をテーマとした名作は数多いが、本作のクライマックスは意外にもJC（だけの決断）によるフェルナンとドミニクの脱獄劇。自分の父親は一体誰だ？そんな人生最大の問題に直面している時に、母親のアリスが看守のJCとイチャイチャしている姿を見れば、アントニオの怒りが爆発するのは当然。その結果、一度は川に捨てたと言っていた銃を持ち出して、JCに対し「母親から離れる！でないと撃つぞ！」と迫ったのは当然だが、さてその後の展開は・・・？

本作は、2012年のベネチア国際映画祭のオリゾンティ部門で審査員特別賞を受賞した映画だが、ハイライトで展開されるいかにも間の抜けた脱獄シーンを観ていると、私にはとてもその賞に値するとは思えない。一体JCは何をどのように考えて、フェルナンとドミニクを脱獄させるために車の中にアリスとアントニオを乗せて、アリスの家から刑務所に向かったの？そして、何とも稚拙な方法ながら、無事にフェルナンとドミニクを脱獄させた後、アリスとアントニオを含めた4人をどこへ向かわせようとしたの？さらに、4人の乗った車が引き返してきて「お前も乗れ！」と言われると、JCはなぜすぐにその車に乗ってしまったの？一体あんたは、これからどうするつもり？いくらタンゴは魂といっても、こりゃ八チャメチャでは・・・。

そんな中、刑務所内では囚人たちのタンゴの腕は急上達しているらしい。その男たちだけのステップは華麗なものだ。なるほど、なるほど。しかし・・・。

2013（平

成25）年10月29日記